# 第２回板橋区教育ビジョン 2035 検討委員会議事録

| | |
|---|---|
| 会　議　名 | 第２回板橋区教育ビジョン 2035 検討委員会 |
| 開催日時 | 令和６年７月 18 日（木）午前 10 時から午前 11 時 55 分まで |
| 開催場所 | 区役所北館第二委員会室 |
| 出　席　者 | 【委員】天笠委員長、笹井副委員長、倉斗委員、児美川委員、三枝委員、安彦委員、豊田委員、本間委員、木村委員、中川委員、林委員、雨谷委員<br>【事務局】教育総務課長事務取扱教育委員会事務局参事、学務課長、指導室長、新しい学校づくり課長、学校配置調整担当課長、教育委員会事務局副参事（施設整備担当）、生涯学習課長、地域教育力推進課長、教育支援センター所長、中央図書館長 |
| 欠　席　者 | 【委員】髙田委員、伊藤委員 |
| 会議の公開 | 公開 |
| 傍聴者数 | １名 |
| 次　　第 | １　前回の検討委員会の振り返り<br>２　「子ども一人ひとりのよさや可能性を引き出し、伸ばす学びの推進」について |
| 配布資料 | 資料１　前回の振り返り<br>資料２　「子ども一人ひとりのよさや可能性を引き出し、伸ばす学びの推進」について<br>資料３　検討委員会名簿（2024.7.18 時点） |
| 会議概要 | １　前回の検討委員会の振り返り<br>事務局より資料説明を行った。<br>〔主な意見〕<br>・１ページ目のピラミッド図に即して、成果と課題を整理するといった方法で検証し、より整理された情報を提示していただきたい。<br>２　「子ども一人ひとりのよさや可能性を引き出し、伸ばす学びの推進」について事務局より、資料説明を行った。<br>〔主な意見〕<br>（１）幼児期における生きる力の基礎づくりについて<br>・区立幼稚園のこれまでの成果とこれから想定される課題について説明いただきたい。<br>→区立幼稚園は、幼児期における教育の標準園という位置付けで、公の幼児教育の場として標準的な教育を行っている。高島幼稚園では、配慮が必要な子どもや外国籍の子どもが増加しており、そこに対する取組についても、公私立間で共有していく役割を担っている。（事務局）<br>・文字の習得は、本来、小学校に入学後に学ぶが、幼稚園・保育園で一通り、ひらがなを書けるようになることが一般化しつつある。親はまだまだ学力で測られる社会と思っていて、学力で遅れをとってはいけないという発想から、幼児期の文字の習得を捨てきれないと強く感じる。<br>・幼児期で「学び」というと、漢字や英語といった文字の習得をイメージする気が |

| | |
|---|---|
| | するが、「遊びを中心とした」というのを頭に持ってきたのは非常によい。<br>・ 小学校に入学して適応困難を示す子どもは、必ずしも学力に関連しているわけではない。遊びが絶対的に欠如しており、失敗を経験しても、その経験から何かを学び、再チャレンジするレジリエンス、人との関わりを通じて互いに成長する意欲、新しいことに対する好奇心と挑戦精神といった要素が、子どもたちには必要である。<br>・ 幼少期を振り返ると、大人に管理されない空間・時間で、子どもたち同士で群れる中で生み出される関係性が、非認知能力、つまりコンピテンシーの発展に大いに役立ったのではないかと考えるため、こういった視点を持って、検討を進めていただきたい。<br>・ 幼稚園・保育園は小学校に入る練習をする場ではない。就学前は、幼稚園、保育園を満喫して、学校に入ってきてよいということで、「スタート・カリキュラム」を使っている。一方、「スタート・カリキュラム」自体は、見直す時期に来ていると認識している。<br>・ 学校に来さえすれば、教室に入れば、その子らしく過ごすことはできているが、校門で親との分離が難しい子が非常に増えている。担任が怖い、勉強がわからないというよりも、家が心地よい、もう少し保護者といたい、そういう理由が多い。最近は、教室の中にまで入って見送りをする保護者が多い傾向である。学校での子どもの様子を発信して、安心してもらえるよう心がけている。<br>・ 保育園、幼稚園から小学校への接続について、園は学校にみんなを連れていったり、体験をさせたりと、学校に慣れさせるための施策に取り組んでいるが、学校の先生が保育園や幼稚園に来て、どう過ごしているかを見ることはあるのだろうか。相互で連携が図られるとよい。<br>・ 幼稚園・保育園と小学校の関わりは、全体的として少ない。幼稚園の指導録等を見ると、以前から課題があることがわかり、園での様子を聴き取りする必要性を感じるが、教員が忙し過ぎて、そういう時間が取れない状況である。こういった要因が保幼小の接続を難しくしている。<br>・ 保育園に遅くまで在園し、帰宅後は食事して寝るだけの生活で、保育園と家庭での生活がシームレスであった。しかし、4 月から学童保育に移行すると、保育園と環境が異なり、抵抗感を持つ子どもが多く、学校に関連する学童保育での経験が、学校自体を怖く感じさせることがある。保育園や幼稚園から学校への進学は、学童保育等を含めた生活全般がシームレスにつながることが重要と考える。<br>・ 幼稚園は保育園よりも早く終わると思っていたが、幼稚園も時代に合わせて変わっており、両親がフルタイムで共働きでも、幼稚園を選ぶようになってきている。<br>・ 私立保育園への入園が増える中で、保育園で子どもを保育している方は、日々手一杯な感じで、小学校のことまで考えられていないのではないだろうか。また、各園で特色がある中で、幼児期を過ごすことで、子どもの性格にも大きな違いが生まれるだろう。そういう中で一つの小学校に入学してくるわけで、180 ほどの |

| | |
|---|---|
| | 幼児教育施設を平準化する方がいいとは思わないまでも、小学校に上がってくるまでに押さえておいてほしいことを、幼児教育施設と小学校が共有できるような指針があれば、小学校一年生になった時の問題が減るのではないか。<br>・ 保育園の園長先生と話す中で、地域とのつながり、地域で子育てが繋がっていく重要性を感じる。<br>・ 幼児期の中心的な教育テーマは、環境による教育である。環境を広げて捉えるならば、地域と繋がるという視点も大切だろう。<br>・ 保育園周辺では、子どもの声がうるさいと言う方もいて、地域で育てると言いながらも、社会的な共通理解が難しい時代である。10 年先を見据えた時、基本的には地域との関わりの中で子どもを育てていく、とりわけ幼少期においては、そういうまなざしが実は大切だということが、盛り込まれてくるとよい。保幼小の接続は教育関係者だけでなく、地域も加わって、地域の力を生かしてプランづくりするのも一つの方法である。<br>・ 幼児期について、保護者の教育も必要であるため、必要な支援を充実させていく必要がある。しかしながら、具体的内容がわからないと何が不足しているのかわからない。<br>（２）学童期以降における、これからの社会を生き抜く力の育成<br>・ 第１回でウェルビーイングがキーワードだったが、どこからも見えてこない。幼児期であれば、人との繋がりや、自分を好きになるといったところがあると思うが、そういった言葉が見られない。教育振興基本計画では、「個人が獲得・達成する能力や状態に基づくウェルビーイング」の要素として、自己肯定感、自己実現と、「人とのつながり、関係性に基づくウェルビーイング」の要素の、利他性や協働性、社会貢献意識等が掲げられ、両者の調和を図りつつ一体的に向上させることが重要だと示されている。学童期以降の資料のどこにも出てこないことは、再考いただきたい。ウェルビーイングの向上をどのように達成するかが、重要なキーワードと考える。<br>・ 研究によれば、学力に関係する要因である、非認知能力は 3 歳や 4 歳から形成され始めるとされ、幼少期にしっかりとこの能力を育てることが重要であり、それが将来の学習に大きく影響すると言われている。学童期以降の非認知能力についても、具体的にどう記述していくかを検討いただきたい。<br>・ ウェルビーイングとは、結局幸せであり、幸せとは、子どもも大人も、体も心も安定していて、穏やかに、自分と周りの人たちと関わっている状態のことだと思う。ハッピーといった瞬間ではなくて、それが続いていくことがウェルビーイングとすると、生涯教育を念頭に見据えた中で考えられるとよい。<br>・ 幼児期が「生きる力の基礎づくり」、土台を作るという表現が、学童期になると「生き抜く力」と表現されていて、やはり一段落強いと感じる。これからの社会が、変化が激しい、不透明な社会だから、自分の力で生き抜いていかなければならないみたいなイメージで捉えられるとすると、本当に独力で何とかしなければ |

| | |
|---|---|
| | ならないみたいにとらえられてしまう懸念がある。不登校が 30 万人、長期欠席が 50 万人いる状況で、しんどい子たちもいて、「生きる力」、「生き抜く力」と言われたときにどういうメッセージになるのかが、気になる。上手に SOS を出せる、助けてといえることも立派な「生きる力」だと思う。そうとらえた時に、「生き抜く力」は、何かこう突き抜けて言ってしまってよいのだろうかと感じた。<br>・ タイトルの「生き抜く」は、義務感というか、生きるよりも、少し負担感がある言葉である。<br>・ トップに学力の定着と出てくると、やはり学力なのかという印象を受けてしまう懸念がある。資料では、参考にある学力の定義をみることで、偏差値ではない広義の意味での学ぶ力を意味していることが書かれている。トップに学力という言葉を持ってくるのであれば、板橋区の姿勢として、学力の意味をしっかり見せられるとよい。<br>・ フリースクールで関わる多くの保護者の思いは、学力に対するものである。しかしながら、フリースクールに通っている子が一番大変だと思うのは、体力がないことである。体が非常に細い、逆に太っている、起きる、歯を磨きく、風呂に入ることが大変という状況にもかかわらず、保護者が心配するのは、学力の問題である。そういう問題意識だと、どうしても自己肯定感とか自己有用感が高くならない。学力をどうとらえるかという点を、もう少し親が楽に捉えられるように発信していけたらよい。同じように、キャリア教育も、ほとんど大学進学の話になってしまう。キャリア教育の「キャリア」は、「人生」と意味と思うが、保護者も生徒も、高校に入って授業についていけないと大学にいけないといった話が、キャリア教育になっている。キャリア教育という言葉も、定義を広くして、特に保護者に発信していけるとよい。<br>・ 保護者が以前より多くの学力や進学に関する情報を持つようになったものの、得た情報の価値や整理が十分ではなく、情報に振り回されている現状もあるだろう。<br>・ 板橋区では、保護者の立場で、PTA が進路相談会を行い、情報発信をしている。学力だけを心配する保護者がいる一方で、学力は関係なく、子どもの状態を考える保護者もいる。保護者が色々な情報に触れて最後に決断できるか、できないかについては、難しい問題と思っている。<br>・ 赤塚第二中学校では、毎年約 190 名が卒業し、うち約 10 名が通信制等を選択する。これには、不登校や通学が難しい生徒も含まれ、主体的に通信制に選ぶ生徒もいれば、精神的な病気や長期欠席を理由に進学しない生徒もいる。<br>・ コロナを経て、学校に行かなくても学べるようになり、学校のあり方が変わってきていると感じる。画一的な一斉授業に代わって、例えば、学びのエリアで一斉授業を行う、一人の先生が複数の学校に授業を提供する、あるいは区の一つの学校が全校の授業を担当するなど、多様な学びの形を取り入れることで、働き方改革にもつながるのではないだろうか。 |

| | |
|---|---|
| | ・ オンライン会議では感情の読み取りが難しく、最近では直接のコミュニケーションの重要性が再認識されている。リアルとオンラインのバランスを考える必要がある。<br>・ キーワードは「多様化」であり、これにどう対応し、備えていくのかについて、既存の学校とともに、さまざまな受け皿が今後も使えるのかどうか、それぞれの場において学べる機会や環境をより丁寧に整備していく必要がある。その上で、学校の位置づけや存在意義を改めて考えると、学校は単なる空間や舞台ではなく、学びの核としての役割を担っており、その価値は今後も変わらないと考える。<br>・ 学校に来なくても、教科書に書いてある様々な問題に対して答えを考えることはできるが、オンライン授業では、子どもも、教員も「やり切った」という実感が得られにくい。小学校の授業は、最初の 0 分から 45 分の間に変化を感じることが重要で、「わかった」「できた」「できなかった」といった実感を、リアルでないと感じることが難しい。<br>・ 授業革新を率先して進めている教員は、ICT でできることと、生の関わりでしかできないことを上手に分けて、時間配分や内容を工夫しながら授業を組み立てており、そのような授業は、子どもに「やってよかった」と感じさせる力がある。子どもと同様に、教員も多様である。個々の教師が持つ力を出し合い、多様な授業を作り出せる学校組織が理想である。<br>・ 現在も自宅で教員が配信する授業を見ながら、学びを深めているケースはあり、個別最適な学びは非常に重要である。一方、協働的な学びは人がいなければできず、学校での学びにおいて今一番大切にしていることであり、今後、協働的な学びをさらに充実させることが大切だと考える。<br>・ 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な学びを実現するため、学校を変革する必要があり、その鍵の一つは小中一貫教育と考える。<br>・ 小学校と中学校では、文化が違うため、接続をどのようにしていくかが、課題である。中学校の教員が特に考えなければならないのは、どのような授業を作っていくかという点であるが、まだその意識に至っていない教員が少なくない。大学では、授業中でもわからないことは、自ら調べるのが一般的だが、中学校では、授業で教員が話している最中に、子どもがわからない言葉をパソコンで調べていると、中学校では「先生の説明を聞け」と言われがちである。教員自身の意識を、「教える教育」から「生徒に学びを気づかせる教育」へ変えていく必要がある。<br>（３）誰ひとり取り残さないきめ細かな教育の充実<br>・ 多様な子が同じ空間にいることで、全く同じものを習っているはずなのに違う答えが出る、違う結果になってしまう。違うやり方をしたが、同じ答えが出る。そういう自分にはないやり方が同時多発的に起こっているという環境を共有することが、小学校・中学校の意味と考える。学び方を学び取るという初学者の時期に、学校施設がある意味は非常に大きいと感じる。<br>・ 「誰一人取り残さない」方針のもとで個別化や ICT 化を進めると、学校の魅力が |

| | |
|---|---|
| | 一部損なわれる可能性があると考える。学校の良さは、知識の伝達だけでなく、興味や思いを加えて発信する点にある。不登校の子どもが抱える問題は、顔を突き合わせたコミュニケーションが不足していることにある。学校での直接の対話やコミュニケーションの訓練が欠けてはならないと考える。<br>・ インクルーシブ教育の枠を、障がい、日本語、経済的な困難と広げていく話は大賛成だが、どこの受け皿で引き受けて教育するかは、検討する必要がある。１つの学級の中で、個別最適化して、ニーズに応じた対応を行い、通常学級と特別支援学級が混在し、一体化していく学校像をめざすのか。それとも、個別対応をするとみんな一緒というわけにはいかないため、従来の学級のあり方を上手に崩していくのかといったところが、まだまだ見えないため、個別最適と協働的の両方をどう実現するのかを出していく必要があるのではないか。<br>・ 個別最適な学びに対して、「全員が一人一人異なる学びをしている」というイメージを持ちがちだが、実際には異なり、例えば、板橋区の学校では、タブレットを使って一人で勉強する子もいれば、教室で板書をする先生から同じ内容を教わる子もいる。つまり、集団で学びたい子はその選択肢があり、また一人で学びたい子もそのようにできるということで、必ずしも全員が一人一人異なる学びをしているわけではない。<br>・ 個別最適な学びと協働的な学びという、一見すると矛盾するような二つのことを両立させる必要がある。これが「誰一人取り残さない」という目標に繋がると考えている。個別最適な学びはオンラインを活用することで実現可能だが、協働的な学びはやはり学校で行うべきだと考える。協働という概念が、主体同士の対等な関係性に基づいている。発言する者とそれを聞く者が流動的に役割を交代する対等な関係性のもとで、子どもを育てていく。学校と地域住民の関係においても、対等な関係の中で様々な活動を行うことが肝要である。<br>・ 知的障がいのある特別支援学級では比較的穏やかな時間もあるが、一方で非常に厳しい場面も見られる。発達の問題を抱えた子どもに対して、一般的には考えられないような対立や、やり取りがあることもある。ただ、知的障がいのある子を持つ家庭は、保護者と子どもとの関わりが密になるため、結びつきは非常に強いという良い面もある。<br>・ 発達障がいのある子どもの発達的な課題に対応するため、板橋区では、拠点校方式や在籍校方式など、様々な方法で教員が対応しているが、特別支援教室でのいろいろなスキルや考え方を通常学級でも活かすという意味で、通常学級の教員の意識も大きく変わってきている。個別最適と協働的な学びの両輪が成立しているクラスでは、そういう子も非常に過ごしやすい。個別の学びは以前から行われてきたが、最適化されていなかったかもしれない。個別の学びは、一人一人に同じプリントを使うことではなく、その子に合った学びを提供することで最適化されると考えている。個別最適化と協働的学びについて再考する必要がある。<br>・ 板橋第六小学校には日本語学級もあるが、日本語指導の中で、子どもたちが在籍 |

| | |
|---|---|
| | 校に戻ったときに日本語を使って他の子や教員と関わることができるかが、10 年先に外国籍の子どもが増える中で大きな課題になるだろう。<br>・ 学校の規模は通常学級の数で表され、標準規模は 18 学級とされているが、特別支援学級は別途カウントされる。10 年先を見据えたとき、このカウント方法が適切かどうか疑問である。従来の基準で学校の規模を捉え、予算や人員の配置を決定するシステムが今後も適切か再考する必要がある。<br>・ 令和 5 年度全国学力・学習状況調査について、ウェルビーイングに関する分析報告書がよると、学校という場所において、学力そのものより、友達との関係、教師との関係など他者との繋がりの方が、児童生徒の主観的幸福感を向上する重要な役割を果たしており、それを実現するには教師のウェルビーイングが重要であると指摘されている。学校におけるウェルビーイングは、子どもと教員との関係や、教員のウェルビーイングが実現されない限りは、進まないのではないだろうか。そういった意味で、スライド 19 の 7 番目の項目として、「教員の働き方改革」を入れることをご検討いただきたい。<br>・ 日本でウェルビーイング研究の第一人者は、慶應義塾大学大学院の前野隆司先生で、ウェルビーイングを構成する四つの因子を提唱している。それは、「やってみよう」因子（自己実現と成長の因子）、「ありがとう」因子（つながりと感謝の因子）、「なんとかなる」因子（前向きと楽観の因子）、「ありのままに」因子（独立と自分らしさの因子）である。これらの因子は、学校教育が目指す価値観と一致している。子どもたちがこれらの要素を身につけることで、ウェルビーイングの拡充に繋がると考える。前野先生の研究など、様々な情報源を活用し、ウェルビーイングについて再考いただきたい。<br>3　事務局より事務連絡<br>事務局より、次回の日程を連絡した。 |
| 所　管　課 | 教育委員会事務局教育総務課計画係 |